

Title	逐次刊行物における1つの単位としての巻号
Author(s)	諏訪, 敏幸
Citation	大図研論文集. 21 P.13-P.24
Issue Date	1998-08
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/3055
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

逐次刊行物における1つの単位としての巻号

大阪大学生命科学図書館 諏訪敏幸*

抄 録

逐次刊行物の巻号について、次の2点を中心に考察した：①逐次刊行物の巻号とは何か、またそれはどんな構造を持っているか、②それは目録記入の単位となり得るか。

①については、逐次刊行の単位と分冊刊行の単位との違いに着目し、a) 通号逐次型、b) 巻逐次型、c) 巻一号逐次型の3種類を区別して論じた。これらを通じて、一般的に逐次刊行物における巻号次構造は、1つの逐次刊行単位を核として構成されていることを示した。

この結果にもとづき、②について引き続き逐次刊行単位と分冊刊行単位の違いに着目しつつ、目録の機能の観点から考察した。その結果、目録はその全体が著作へのリンク構造として機能すべきであり、そのために逐次刊行物目録の構造は、逐次刊行物の単位—逐次刊行単位—構成著作物の単位という骨格を備えるべきだと述べた。逐次刊行単位は、本質的に下位の構成著作物への経路情報として上述のような目録の対象単位となり得る。

1. はじめに

逐次刊行物は、巻号次という重要な書誌要素を持っている。現実の逐次刊行物は、常にその何巻何号という形で現れる。巻号次抜きに逐次刊行物を取り扱うことはできない。

他方、目録におけるその取り扱いについては幾つか検討を要すると思われる点がある。第1に、今日の主要な目録法では1つの継続する逐次刊行物全体が一括記入の1単位とされる。しかし構成著作物(収載論文等)を対象とする書誌との関連付けを考えた場合、個々の巻号に対応する記入単位の欠落^{1), 2)}は、両者の直接的なリンクを不可能にする。第2に、巻号次は

逐次刊行物を単位とする記入の記述項目の1つとして巻次年月次という形で現れるが、その記述は断片的であり、初号を欠くために記述されないこともしばしばある³⁾。現実の逐次刊行物が必ず巻号次を伴うのに、目録には巻号に関する十分な情報が現れないのは奇妙である。この問題は、書誌的記録の対象—逐次刊行物全体—とその記述の基盤—初号またはその代替となる特定の号—との違いにも関係している。第3に、単行書等の巻次がタイトルの一部とされるのと差異があり、説明の必要がある。第4に、年鑑・白書等も含めモノグラフィックなシリーズの各巻は、モノグラフとしてなら1記入単位となるが逐次刊行物の1巻としては記

*すわ としゆき 1998年5月15日受理

E-mail: mktb@library.osaka-u.ac.jp

入単位にならないという不整合がある⁴⁾。

以上のような問題意識を背景として、本稿では次の2つの問題について考える。

1) 逐次刊行物の巻号次とは何か。またそれはどんな構造を持っているか。

2) それは目録記入の単位となり得るか。

もともと本稿は、「大図研論文集」に掲載中の他の論文⁵⁾の一部とする予定だった。しかし諸般の事情からこれを先行分離して公にすることにした。本稿の対象、方法、用語等は特に断わらない限り上掲論文と同じである。

以下、第2章では現行目録法における図書等の巻次一般について丸山昭二郎論文に依拠しつつ概観する。第3章では逐次刊行物の巻号次そのものについて整理検討する。第4章では目録におけるその取り扱いの可能性について検討する。

2. 丸山論文による巻次の定義

丸山⁶⁾は、目録規則における巻次等とは、「データとしてはタイトルの一種であるが、書誌レベル間のリンクづけを行う機能を有する、特別なデータである。」と述べている。丸山は「『書誌単位を出版物理単位で分割するために与えられた名称で…順序付けのためのもの』を『巻次等』であるとする学術情報センターの定義を妥当と認め、かつ各種の目録規則における記述文法の面からこれを裏づける分析を行った。その結果として得られた上掲の結論は、書誌データの1つとしての巻次の本質を的確に捉えている。

同著では逐次刊行物の巻号次等を、「記述対象資料が複数の部分で構成されている場合、資料全体の構成部分の数を、書誌的な識別を行なうために記録するのが書誌的巻数であり、一見巻次等と類似しているが、別の書誌データとして取り扱うべき」ものの1つとみなし(同著1.4; 2.3⑩)、上に言う巻次等とは異質だとす

る⁷⁾。この論考は、現行目録規則等の立場を踏まえてそこでの巻次の取り扱いについて観察するという方法を探っている。したがって逐次刊行物の巻次年月次についてはあくまでもNCR1987に言う逐次刊行書誌単位の立場 — 逐次刊行書誌単位は基礎書誌単位である — からこれを見ており、逐次刊行物の巻号次が上に結論されたような図書等の巻次と同様の性格を持ち得るかどうかは当初から考察の範囲外にある。

本稿では丸山の上掲の結論を現行目録規則の立場による図書等の巻次一般の本質論として踏まえつつも、逐次刊行物の巻号次との関係については自ずと視点を異にして、逐次刊行物の記入単位と巻号次との関係について検討することになる。また、上掲著では詳しく言及されていないもう1つの論点、「リンク付け」または「所在位置」(同著2.1.2)としての巻次とタイトルとしての巻次との関係についても注意を払っていきたい。

3. 逐次刊行物の巻号次と年次

3. 1. 逐次刊行単位と分冊刊行単位

図書の巻は、合集を構成する巻のような場合を別にして分冊刊行の単位であると考えられる。分冊刊行される単位とその上位の単位との間には次のような関係がある⁸⁾。

- ①上位の単位には、著作物または編集物としての知的な統一性が認められる。
- ②上位の単位には、著作物または編集物としての内容的完結性が認められる。
- ③下位の単位は、上位の単位の知的統一性と完結性の下での知的および物理的な分割である。(ただし必ずしも物理的分割と知的分割が一致するとは限らない — 例えば辞書の分冊刊行。)

上述の①は逐次刊行物の巻号にも共通している。しかし②と③は、逐次刊行物が完結性を持

たないことを特徴とする以上、当然異なってくる。

逐次刊行物とは、終期を定めず逐次に刊行される刊行物である。「逐次に刊行される」とは、1つの刊行意図の下で一連の単位刊行物が時系列的に次々と刊行されることを言う。また、「終期を定めず」とは、それらの単位刊行物が、ある予定された刊行物の物理的分割、またはある予定された編集物の構成部分ではないことを言う。このような単位刊行物が順を逐って継続的に刊行されるのが逐次刊行である。逐次刊行される個々の刊行単位 — 以下これを逐次刊行単位と言う — は、ある完結した全体の分枝として現れるのではなく、常に新たに発生したものとして現れる⁹⁾。

分冊刊行は図書等も逐次刊行物も含めて刊行物一般に見られる刊行形態だが、逐次刊行は逐次刊行物に固有の刊行形態である。

逐次刊行物の刊行単位は、巻、号など1または複数の階層から成る構造を持つ。各階層は、逐次刊行単位または分冊刊行単位であり、最下位は同時に刊行物理単位でもある。

ではこれらのレベルの中で、逐次刊行単位と分冊刊行単位がどのように組み合わせられているか、つまり巻号の内部構造について、次に観察したい。

3. 2. 逐次刊行物における巻号の構造

3. 2. 1. 通号逐次型

通号または通巻だけで番号づけされている雑誌、モノグラフシリーズ、年鑑、白書等は、単純に逐次刊行単位だけから成っている。通号と通巻とは呼称の違いだけで本質的には同じものである。特にモノグラフィックな刊行物は、一つ一つの号（巻）の内容的な独立性が高く、巻一号のような副次的な構造を作る余地が少ないので、通号逐次型になりやすい。通巻（通号）という番号付けの形式は、このような刊行物の流通形態の反映でもある。このような刊行物は

一方で「終期を予定しない」シリーズとして頒布されると共に、個々の巻がその内容的な独立性から個別に頒布される機会も多い。このような2種類の頒布形式を2つながら同時に体现する番号付けとして、巻一号のような構造のない単純な通号（通巻）は、その性質に合っている。

3. 2. 2. 巻逐次型

ジャーナルの典型的な出版スタイルは、巻を逐次刊行単位とし、巻の下で各号を巻の物理的分割、つまり分冊刊行単位として出版するというものである。各号が分冊刊行単位だということは、次の諸点に表現されている。

1) 各号は巻のいわば未完成の部品であり、その造本形態は仮綴じである。巻を構成する他の部品である、巻の標題紙や索引と共に合冊製本され、表紙が付けられて、初めて完成した1つの巻となる。

2) 巻の中の各号のページは通しページになっている。それは、完成した巻の中でのロケーションを示している。

多くのSTM系の学術雑誌は、実際にこのようなスタイルで出版されている。つまりこれらの雑誌の場合、巻は逐次刊行単位、号は分冊刊行単位であると考えることができる。

一部の学術雑誌では例えば…10巻-11巻1号-11巻2号-12巻…のように巻によって号があったりなかったりすることがある。これもまた、巻こそがあくまでも逐次刊行単位であり号は物理的事情から巻を分割したものに過ぎないという立場を物語る。

3. 2. 3. 巻一号逐次型

多くの雑誌、紀要、ニューズレター、会報などの場合、巻号の表示は上と同じく巻一号というスタイルをとるものの、号は巻の分冊というより、それぞれが自立した逐次刊行単位と考えられる。なぜなら、それらの出版形態は明らか

に合冊製本を前提としていないからである。例えば、ページ付けが各号ごとに1から与えられていたり、巻の標題紙が出版されなかったり、目次が各号の表紙に印刷され別刷りで発行されない — つまり各号の仮綴じ用の表紙を除去して製本することが想定されていない —、等々。また、多くのマガジン類は読み捨てを前提として出版され、物理的形態や巻号表示がどうかにかかわらず各号が巻の分割であり得ないのは明らかである。

これらの逐次刊行物の「号」は逐次刊行単位そのものである。では「巻」は何だろうか？

このような刊行物の「巻」は多くの場合、予約購読の単位¹⁰⁾、団体の1事業年度等々、つまりその刊行物の経済的、経営的、もしくは組織的な計算単位として機能している。これについて2通りの解釈が成り立つ。

第1の立場は、これらの巻次は号を括る仮想的な集合名、いわば号の上部構造であるとみなすというものである。つまり表面的には巻一号という構造だが、実質的には1レベルの「巻(号)」が、逐次刊行単位なのである。

第2の立場は、このような巻号構造は刊行行為自体の階層構造を反映していると捉えるものである。一方で、企画、集稿、編集、印刷、製本といったプロセスは個々の号ごとに完結している。他方で、財政を含む発行計画や内容のフレームづくりは、概ね1年単位で計画・実行される。このような刊行行為そのものの二重構造が巻一号に反映される。

どちらがより実態に近いかは、個々の刊行物ごとに異なる。例えば、大学の紀要や団体の会報は後者の性格が強い。これに対して、商業的に発行される日本のマガジン類の多くは前者の色合いが濃いと考えられる。

3. 2. 4. 相互関係および中間・混合形態

巻逐次型と巻一号逐次型は巻号次の形式は同じだが、内実が異なる。通号逐次型と巻一号逐

次型は、巻号次の形式は異なるが、その内実は — 各刊行単位がより上位の単位の物理的・時間的分割ではないという意味で — 同じである。これらの中間的あるいは移行的な性格や、二重性格と思われるものもしばしばある。例えば巻逐次型の学術雑誌で通号を持つものは、巻逐次型であると同時に通号逐次型でもあることを表現しており、したがって同時に巻一号逐次型でもあることになる。

また、年鑑、白書等で時に下位が時系列性のない分冊に固定的に分割されることがあることもある。これは通号逐次型の一変形であり、形式的に巻一号逐次型に近付いた中間形態である。このタイプはしばしば次のような問題を伴い、実務に困難をもたらす。

- 1) 分冊刊行単位が内容的・書誌的独立性を強め、かつ継続的に刊行されることで、部編に近づく。または、媒体や言語を異にする版としての性格を併せ持つ。
- 2) 分冊刊行単位が多階層の構造をなす。
(日本の国勢調査報告書が典型的)。

Natureのように、巻と通号を持つ刊行物は巻一通号という巻号次を持つものとして扱われることが多い。しかし巻と通号とは本来別々の体系であり、この刊行物は本来次のいずれかだと考えられるべきである：①通号という逐次刊行単位と巻という逐次刊行単位を並行して持っている、または、②通号という逐次刊行単位を持ち、予約等々の単位としての巻という単位を仮想的に持っている。仮に通号が巻の下の順序付け数字として機能するとすれば、それは流用によるものである。

3. 2. 5. 年次と号

「巻」の位置に年次が現れるものがある。

年次が相対的な年次 — 大陸系の団体機関誌等でしばしば見られる、その団体または雑誌の第何年の形式、例えば17^e annéeや31. Jahrgangのように — の場合は、年次を巻に準ずるもの

として単純に巻逐次型または巻一号逐次型とみなしてほとんど問題ない。

絶対的な年次 — 1968のように — が現れる場合は、2つのタイプがある。1つは年次一通号という形式、もう1つは、年があたかも「巻」であるかのように、毎年1号からある号数まで発行されるという場合である。

年次一通号の場合は仮想的な単位として巻の代わりに年という単位があるのだと考えることが一応できる。また、もともと AACR2において、いわゆる巻号すなわち数字による順序付けは年月次表示と一応別のものである。したがって、通号による番号付けと年を別体系だとみなしても特に問題はない。

後者、例えばロシア誌にしばしば見られるような、各年ごとに1号から12号までが現れる刊行物の場合、事態はもう少し複雑である¹¹⁾。目録上では、この問題の形式的な側面だけを捉えて、“Vol. numbering begins with 1 each year.”などと注記して済ませる余地がある。つまり数字による順序付けは「号」の部分しか存在しないという考え方である。

しかし、毎年数字が1に戻るということは、この番号付けが年という体系のもとで与えられる下位の体系だということを示しているとも考えられる。つまり、形式的に見れば数字による番号付けは1階層しかないが、内実は巻逐次型か巻一号逐次型のどちらかだということである。雑誌によって多少異なると思われるが、一般的には巻逐次型より巻一号逐次型に近いと言える。なぜなら、「年」という単位は、その1年間に刊行される各号が1つの「巻」としてまとめられるべきだということを積極的に主張するものではなく、単に1つの刊行サイクルを示すに過ぎないと考えられるからである。

したがってこの場合、目録の記述において、年次を巻のように見立てて“年次(号)”という形式の「巻号次」を記述するのは、形式的にはともかく、実態的な巻号構造の表現としては

あながち誤りとも言えない — むしろ実際に即した適切な表現である — ということになる¹²⁾。NACSISではこのような刊行物のVLYRは必ず“年次(号)”という形式に整形して記述しなければならない。前述のような注記による処理を認めずVLYRの整形を必須とするのはやや行き過ぎの感があるものの、このような整形自体は一般的にむしろ適切と考えられる。

3. 2. 6. 年月次

逐次刊行物が逐次に刊行されるのは、刊行すべき著作が時間的な経過と共に現れるからである。これを表現するのが年月次である。発行年月が実際の刊行行為そのものの時間的な位置を表しているのに対し、年月次は逐次刊行の系列の上でその著作物が属すべき位置を表している。さらに、2以上の号が時間的に同一の順序を占めないという条件を満たすならば、刊行の逐次性は巻号などの順序付けに依らずとも、時間的経過の絶対的尺度である年月次によって表現することができる。年月次は巻号と併用することもできるし、また巻号無しで単独で現れることも可能である。もちろん、年月次なしで巻号だけで逐次性を表現することも可能である。現実には、これらのパターンはすべて実際に現れる。次の2点が重要である。

- ①年月次と巻号次は互いに独立な、パラレルな関係にあり、前項の場合を除いて補完的ないし相互依存的な関係にはない。
- ②巻号次は常に順序性の表現だが、年月次は順序性を表現するとは限らない。

NACSISは年月次の表示がなければ出版年月もしくはこれに代わる著作権表示年等で代用して、必ず“巻号(年月次)”の形でVLYRを記述するよう求めているが、両者が互いに独立である以上これは全くのナンセンスであり、記述の統一性を損なうものでしかない。無用の形式主義と言うべきである¹³⁾。

年月次は時間表示をそのまま逐次性の表現と

して使用するものなので、言語の慣習に依存し、多様な表現の幅がある。そこから号と号を比較した相対的な前後関係は読み取ることはできるが、ある号が何番目に位置するかという絶対的な順番を読み取ることは必ずしもできない。例えば¹⁴⁾：

- ・ … spring 1997 - summer 1997/1998 - autumn 1998 … (南半球で)
- ・ … July/Sept. 1998 - winter 1998 …
- ・ … fall 1998 - Christmas issue 1998 - winter 1999 - spring 1999 …
- ・ … 1st quarter, '97 - 2nd quarter, '97 - 4th quarter, '97 - 1st quarter, '98 …
- ・ … Jan. 1998 - Jan. 15, 1998 - Feb. 1998 - Mar. 1998 - Mar. 15, 1998 …
- ・ … Jan. 1, 1998 - Jan. 4, 1998 - Jan. 8, 1998 - Jan. 11, 1998 …
- ・ … 1998 - 1998 - 1998 - 1998 - 1999 - 1999 - 1999 - 1999 …

にもかかわらず、年月次は著作の立場から見た実体的な逐次性のもう1つの体系的表現というべきであり、巻号による順序付けの体系に従属するものではない。

3. 2. 7. 小括

以上、逐次刊行物の巻号の実体的な構造について基本的には3分類し概観した。

これらの共通点、つまり逐次刊行物の巻号体系の法則的な構造は、次の通りである：1つの巻号体系の中で逐次刊行を表現する単位は1レベルしか現れず、複数レベルの巻号体系は、その上下に仮想的または分冊的な単位構造を付加することによって形づくられる。

ただし、1つの刊行物が並行して2つ以上の巻号体系を持ち、「巻」「号」等の単位も複数の性格を帯びることがある。

3. 3. 巻号次

3. 3. 1. 巻号次の性格

実際に個々の刊行物に与えられる巻号次は、巻号構造の具体的実現、つまり巻号構造の現象形態である。したがって、必ずしも単純な番号付けとは言えない一面を持っている。以下これについて、次の3つの点から観察する：①合併号、②巻号次の順序と実際の刊行順序との不一致、③巻号構造を超える、あるいは外部的な要因による、巻号次の飛躍・後退および体系の変化などの動揺。

3. 3. 2. 合併号

合併号とは、1つの刊行順序（を占める単位刊行物）に複数の巻号次が与えられるという現象である。例えばある号が“vol. 2, nos. 1/2”という巻号次を与えられているとすると、その号は“vol. 2, no. 1”でありかつ“vol. 2, no. 2”でもあることになる。この号は1つの論理的刊行単位 — としてもしも分冊に分かれていなければ同時に1つの刊行物理単位 — だが、逐次刊行の系列の上では2つの位置を占めているのである。この現象は、巻号次が実際の刊行の物理的番号付けではなく、逐次刊行の系列の上での観念的な順序性を表すものだというをよく示している。稀に見られる“vol. 10, no. 2/ vol. 11, no. 2/ vol. 12, no. 2”のようなとびとびの合併号の例は、このことを更に鮮明に表している。

3. 3. 3. 順序の不一致

巻号次は、逐次刊行の順序を表す標識だが、ここで言う逐次刊行順序とは論理的順序であって物理的順序ではない。つまり巻号次が表すのは、その号がどの号の次に実際に出版されたかではなく、観念的にその号がどの号の次に位置するかということである。両者は必ずしも一致せず、巻号次表示が刊行の順序そのものを表しているとは限らない。

巻号次のうち、分冊刊行単位を示すとみなされる部分、つまり巻逐次型の「号」について、このことは容易に理解できる。「号」が物理的分割である以上、「号」は「巻」の中の物理的位置を示すに過ぎず、それが刊行の順序と一致する保証は必ずしもないからである。

これに対し、逐次刊行単位の表現とみなされる巻号次が刊行順序と一致しないという現象は、一見奇妙に思われる。刊行の逐次性の表現ははずなのになぜ刊行順序の表示とならないなどということがあり得るのだろうか？

その理由は主に次の2つである。

1つは、巻号次体系が全体としては刊行の逐次性の表現であると共に、刊行物の知的（主題的）分割、つまり部編的分割をも反映したものとなるために起こる問題である。典型的には、巻逐次型の雑誌で、ある巻を特定のセクションに割り当てるといったケースがそれに当たる。この場合、予約単位となる数巻ないし数十巻の集合の内部では、巻次はセクションの区分とその中での逐次性を表現している。その集合を超える長期間を見渡すと、巻次の大小は刊行の逐次性を表現している。この場合、巻次は刊行の逐次性とセクション区分を複合的に表現していると言える。

2つめは、刊行計画における順序付けと実際に実現された刊行順序との乖離である。例えば比較的刊行点数の多いモノグラフ・シリーズで数巻分の刊行計画を立てながら出版していく場合、ある巻の原稿の完成が遅れると後続の巻が先に出版されるということが起こる。しかしこの場合も、ある長い範囲で見ると全体としてモノグラフの出現の逐次性を受け形で逐次刊行されていくのであって、逐次刊行物 — より細かく言えば「受け皿型」逐次刊行物 — としての特徴は失われていない。

3. 3. 4. 巻号体系の動揺

巻号次は逐次刊行物としての継続性の表現で

もある。したがって、巻号次体系に変化が起きた場合、その逐次刊行物の継続性そのものに何らかの変化があったのかもしれないと考える余地がある¹⁵⁾。巻号次体系の動揺のタイプと原因はさまざまである。編集方針の変更や学会のプレジデントの交替に伴って巻次を1巻1号に戻す例、これまで巻号が与えられてきた刊行物が学会の100周年を記念して第100年1号に飛躍した例、New ser. の巻号次が旧シリーズから通しの巻号次に変更された例、誌名の変更や合併に伴う巻号次体系の変更、ミスプリントの固定化、等々。

なお、巻号次表示のうち呼称の部分の変化は、一般的に意味のある変化とはみなされない。通例、継続性と順序性の表現の核心は数字の部分にあり、呼称は数字の意味を説明する語に過ぎないからである¹⁶⁾。

巻号と通号、通号1と通号2のように2種類以上の巻号次が与えられている刊行物のあるものは、これら複数の巻号次体系によって、その逐次刊行物を持つ複数の構造、あるいは複数の性格を表現している場合がある。

4. 逐次刊行単位とは何の単位か

4. 1. 逐次刊行単位と分冊刊行単位の比較

目録の対象として、逐次刊行単位は分冊刊行単位や部編とどう違うのだろうか。

部編は刊行物の分割である以前に部分著作物である。部分著作物はある条件の下ではそれ自体が「1つの著作物」とみなされ得るのであり、著作物と部分著作物との間には必ずしもはっきりとした境界線を引くことができない。この点でまずもって刊行物そのものの分割単位である分冊刊行単位および逐次刊行単位と対立する。

次に逐次刊行単位と分冊刊行単位とを比較すると、単位としての安定性の違いが目につく。丸山も前掲論文で「ある著作のテキストは、他

の記録メディアにうつしかえられると、巻次等は消滅したり、逆に新規に発生したりする。」等と指摘しているが、分冊刊行単位は著作の物理的・社会的実現の場面における物理的分割なので、物理的・社会的条件が変わればそれに応じて発生・変化・消滅する。このような変化は、単行書の文庫化や、合冊保存版などでも起こる。これに対し、逐次刊行単位を消滅させることはできない。ただし例外的に、翻訳誌や再刊版において新たにその版独自の逐次刊行単位が発生することはある。しかしこの場合も、何らかの形で原誌の逐次刊行単位との関連付けがなされるのが通例である。覆刻版では物理的な分冊は任意に変更できるが、この場合も逐次刊行単位の書誌的表示は保存される。他方、原誌の分冊刊行単位は一般的に保存されないし、また保存する意味がない。逐次刊行単位は物理的分冊・合冊の操作から独立だが、分冊刊行単位は当然ながらその支配を受けるからである。

このような逐次刊行単位の安定性は、その刊行物に含まれる構成著作物への参照の場面でも現れる。つまり分冊刊行単位が参照のロケーションとして意味を持つのは、その著作物のある特定の版¹⁷⁾に対してに過ぎない。ある版で第3巻の48ページというロケーションは、別の版では第2巻の105ページ、あるいは巻なしの312ページかもしれない。これに対して逐次刊行単位は参照のロケーションとして絶対性を持っている。JR時刻表の1998年4月号はその他の号ではあり得ない。ページは物理的単位なので版の支配を受けるが、雑誌の覆刻版や合冊版の場合は通常元のページ付けが保存される。

つまり分冊刊行単位の巻次は版としての物理的実現にかかわる属性であるのに対し、逐次刊行単位の巻号次体系はその逐次刊行物自体の構造の一部であり、巻号次はその逐次刊行物とそこに含まれる構成著作物とをリンクする役割を持つとすることができる。

以上から、前掲丸山論文におけるタイトルと

「所在位置」という巻次の2つの性格間の関係は、次のように整理することができる。

分冊刊行単位における巻次の場合：〈タイトルとしての巻次〉とは巻次がその特定の版の物理単位に付けられたタイトル（の一部）であることを意味する。また同じく〈所在位置としての巻次〉とは、その特定の版において、その刊行物全体とその中の特定の構成著作物とをリンクする役割を持つことを意味する。ここでは物理単位のタイトルとしての機能が本質であって、ロケーション機能はその結果として派生的に現れるものである。

これに対し逐次刊行単位の場合：巻次は個々の刊行単位を逐次刊行の時系列の中で位置づけるものである。しかし個々の刊行単位は「1つの刊行物」として社会的に現れるので、その限りにおいて、結果的に巻号次はその単位を識別するタイトルの機能をも果たすことになる。つまりロケーションがその本質であり、タイトル機能は派生的である¹⁸⁾。

4. 2. 目録の機能の中の逐次刊行単位

岩下¹⁹⁾はHuglerを引きつつ「あらゆる固有のタイトルで括られたどのレベルの著作もが相対的に著作であり、従ってこのどれもが等しく記述の単位になる。そこには著作を容れものとの関係で律しようとする視点はない。」と言っている。目録の対象が著作だとするならば、究極的にはこの考え方に行き着くのではないかとも思われる。しかし一定のタイトルの下で刊行され続ける逐次刊行物をこのような意味で「1つの著作」と捉えて、そこに含まれる構成著作物との関係を相対的な著作同士の包含関係であるとみなすのは、無理があるように思われる。そもそも逐次刊行物におけるタイトルの継続性は、それを1つの著作として画するほどに絶対的な意味を持つものだろうか？²⁰⁾ 逐次刊行物は、確かに編集著作物には違いないが、その本質は情報流通の経路と言うべきである²¹⁾。種

別によってその具体的な様相はやや異なるが、読者を特定の著作に導く仲立ちをするのが逐次刊行物という存在であり、通常は読者の要求も、逐次刊行物自体ではなくそこに含まれる単位著作物に対する要求として現れる。

これを一般化して言うならば、容れものとしての刊行物は、読者を著作へと媒介する経路として機能するものであって、それ自体が — 編集、装丁等といったその刊行物自体の成立に関わる点を別にすれば — 著作ではない。目録においても、刊行物という単位は、目録利用者を最終目的である著作という単位に導くリンクとして機能する一面を持つ²²⁾。その場合、著作がターゲット（到達目標）として目録の対象となるのに対し、刊行物はパス（目標への到達経路）として目録の対象にならなければならない。逐次刊行物 — 特に雑誌やモノグラフィシリーズ — では逐次刊行物とそこに掲載される著作との分離が明確なのでこのことが理解しやすい。単行書の場合は著作が世の中に現れる形態がそのまま1つの刊行物となる。しかし実現形態は単一ではない²³⁾。

利用者の要求は基本的に著作への要求である。利用者は図書館に「マクミラン版のハムレット」を求めて来るのではなく、「どの版かのハムレット」がほしいから来るのである²⁴⁾。そこに導く経路を提供するのが目録の役割である²⁵⁾。したがって目録は、著作を目標に置きつつも、直接的にはそこに至る経路情報をリンク構造として組織化したものでなければならない。逐次刊行物の場合は、逐次刊行物の単位—逐次刊行単位—構成著作物の単位という構造が、目録に求められる。

NCR1987が「著作単位」ではなく「書誌単位」を採用したのは、著作を基準に対象を把握しようとする英米流の考え方から、著作への接近経路としての刊行物に目録の足場を据えたことを意味する。そして刊行物を把握する方法として、新版予備版におけるような物理的存在と

しての刊行物ではなく、書誌的存在としての刊行物に目を向けた。しかしこのことは、目録の対象を書誌単位という自律的な世界 — 著作へのパスではなく — に閉じ込めるという結果をもたらしたように筆者には思われる²⁶⁾。逐次刊行物目録の立場から見ると、継続刊行される刊行物の1つの属性に過ぎないタイトルが過度に重い地位を与えられるとともに、構成書誌単位に至る中間単位である逐次刊行の単位（巻号）が目録システムの中に位置を占めることができなくなった。ISBD-AACR2と発生のおき目は異なるが、結果的にはよく似た矛盾が、ここから生じているように思われる。

5. まとめ

本稿の結論は以下の通りである。

- 1) 逐次刊行物における巻号次構造は、1つの逐次刊行単位とその下位の0～n階層の分冊刊行単位、上位の仮想的単位から成る。逐次刊行物という単位の下位の単位として目録が着目しなければならないのは逐次刊行単位である。
- 2) 目録はその全体が著作へのリンク構造として機能しなければならない。そのために逐次刊行物目録の構造は、逐次刊行物の単位—逐次刊行単位—構成著作物の単位という骨格を備えるべきである²⁷⁾。逐次刊行単位は、逐次刊行物自体がそうであるのと同じく、本質的に下位の構成著作物への経路とロケーションの機能を担うものであり、その意味で上述のような目録対象単位となり得る。

小史と謝辞

本稿の問題意識は1970年頃からのものだが、解答への端緒を得たのは1979年、CODASYL型データベースの図書館業務への適用を考える過

程においてである。この間、丸山昭二郎氏が指摘された目録の媒体と目録形態との関係への問題意識、そして本稿で引用した志保田氏、岩下氏をはじめ、個々のお名前は省かせていただくが、記述独立方式、NDLCRS、NCR1987、AACR2などをめぐる展開された幾多の諸先輩方の研究²⁸⁾が、筆者の導きとなった。上梓にあたり、改めて敬意と感謝の念を捧げたい。また本稿の裏づけとなった実務経験や情報収集については、やはりお名前は省かせていただくが、本学および他大学図書館の皆さんに支えられ、助けていただいた。記して感謝したい。

注

- 1) しばしばこれは物理単位の欠落によるものだと考えられている。例えば：「構成書誌単位は単行書誌単位が複数の（出版）物理単位よりなっているときは、OPAC等におけるの検索の展開を考慮すると、物理単位との構造的連携が必要とされる。…この連携は巻次を要素とすることになる。」（北）。本稿後段では、そうではないという意見を主張する。ただし本稿も、物理単位との連携が必要だということまでは否定しない。
北克一「現行目録基準における『書誌単位』および『記述の基盤』に関する一考察」『整理技術研究』33, 1-20 (1994.5)
- 2) この点については、所蔵に現れる巻号がその役割を果たすではないかという反論が予想される。しかしそれに対しては次のように再反論したい：目録は「何がどこにあるか」を表現するものだが、「何が」を書誌的記録が、また「どこに・あるか」を所蔵が表現するとすれば、個々の「所蔵」巻号の表示は本来書誌的記録の範疇に属するもの、または書誌的巻号とのリンクとみなされるべきである。つまり、本来ならば書誌的記録として現れるべきものが所蔵や「受付」データの中に不完全な形で埋め込まれていると考えるべきである。
- 3) この点で「記述の本体に入らぬ情報は何でも注記に入れるという注記＝ゴミ箱的な考えは、限界にきている」という中村の指摘は適切な問題提起となっている。
中村保彦「“AACR2”の逐次刊行物に関する規定の諸問題」『逐次刊行物研究分科会報告』51, 91-97 (1993)
- 4) この問題についての本文と異なるアプローチ：
Kniesner, D. and C. Willman. The analytical reference in serials cataloging. *Serials librarian*, 26(2), 113-123 (1995)
- 5) 諏訪敏幸「逐次刊行物目録におけるタイトルの変遷と記入単位」。前編は『大図研論文集』19, 37-210 (1997年8月)。20号に補遺。続編は未刊。
- 6) 丸山昭二郎「目録規則における巻次等に関する規定について」『鶴見大学紀要・第4部、人文・社会・自然科学篇』29, 1-20 (1993.3)
- 7) 「和古書、漢籍の記述における書誌的巻数」「図書の状態的記述」をその同類とするが、逐次刊行物における巻次年月次 (VLYR) と形態的記述 (PHYS) の関係については触れられていない。
- 8) 以下で「知的」「内容的」は単一概念である。それぞれの外延的な広がり意識して言葉を使い分けている。また、「分割」という言葉は、合集のように下位の著作単位を編集して創り出される場合と、単行書の分冊のように上位の著作物単位がその本来の姿に対応して下位は文字通りの分割である場合との両方に使用している。両者は元来やや事情を異にし、前者を「分割」と呼ぶのは適当ではない。しかし本文に抽象的に述べた諸点に関する限りこれらは同一の性質を持つ。したがって特に断らない限り両者を積極的に区別せず、いずれも「分割」と呼ぶ。逐次刊行物の場合も、必ずしも上位が下位に「分割」されたとは言えない点があるが、これも「分割」の語を用いる。
- 9) 詳しくは：諏訪敏幸「逐次刊行物とその扱いについての一考察」『大図研論文集』17, 1-15 (1994)
- 10) ふつう外国学術雑誌の刊行と頒布は年 (calendar year, academic year, fiscal year 等) を単位とする。しかしその多くの場合、1年分の予約単位に対して与えられた1または複数の巻という単位が実質的な単位として機能している。また出版者によって、表面上は年だが実質的には巻の集合を予約単位とするもの、あるいははっきりと“current volume

- block”を予約単位とするもの等がある。
- 11) 月刊誌に現れるこの順序数字が「号」なのかそれとも月を表しているのか、戸惑いを覚えることがある。この順序数字が号だというのは、季刊や隔月刊の場合も全く同じように年の下で1, 2, 3, 4 (5, 6)と番号が振られることからの類推である。他方、この順序数字が月かもしれないと思われる理由は、この数字が常に月と一致しているのみならず、年2巻出版される学術雑誌 — ロシアでは稀に見られる — の場合に例えば1月から6月までは1巻1, 2, 3, 4, 5, 6号, 7月から12月までは2巻7, 8, 9, 10, 11, 12号のように番号づけされる例があることなどである。
 - 12) この意見は筆者の従来見解の訂正である。
 - 13) 初期の学総目提出データにおける@CHK — 所蔵と書誌の整合性チェックのための、整形された巻次年月次 — の名残ではないかと想像される。
 - 14) 実例を参考にアレンジしている。
 - 15) 例えばLCRI 12.3G. 諏訪「逐次刊行物目録におけるタイトルの変遷と記入単位」2.1.4をも参照。
 - 16) 厳密に言えばno., issue, part等の各語はその本来の意味が異なるが、実情として必ずしも原意に忠実に使われているとは限らない。そもそも巻号次の呼称は刊行物の書誌的表示の中でも比較的不安定なもの1つである。刊行が続くうちに呼称が交替することはしばしばあるし、同じ号で表示箇所によって呼称が異なることもある。
 - 17) この箇所で言う「版」は派生的著作 — 翻訳, 要約, 累積, 改訂など — としてのmanifestationではなく、ある著作 — 派生的著作も含む — の物理的実現形態としての版である。
 - 18) この違いの根源は、逐次刊行と単行刊行との原理的な違い、つまり逐次刊行単位が著作の直接的な実現ではなく、著作を実現させるものとして — 観念的には著作に先立って — 現れるという点にある。
 - 19) 岩下康夫「“著作単位”“書誌単位”と“書誌階層”」『図書館界』38 (3), 148-154 (Sept. 1986)
 - 20) 詳しくは諏訪 (1997) の事例と議論を参照。
 - 21) 諏訪敏幸「雑誌の機能について」『大図研論文集』17, 16-30 (1994)
 - 22) 「図書館において資料は1冊ごと、物的単位で管理され、貸出される…こうした面に対する書誌レコードは物理単位であることが絶対的といってよい程必要」(志保田) というもう1つの側面がある。ただし本稿の論法でいけば、これも物理的記録へのパスが必要なのであって、必ずしも書誌的記録自体が物理単位であることを要さない。
志保田務「書誌記録の単位・レベル」『TP&D フォーラムシリーズ』1, 4-27 (1992)
 - 23) むしろ“... every work will be available in more than one manifestation ...” (Wainwright) という視点 — 音楽目録の分野がその先行例となっている — からこれからの目録を考えることが重要である。
Wainwright, E. Implications of the dynamic record for the future of cataloguing. *Cataloguing Australia*, 17 (3/4), 7-20, (Sept./Dec. 1991)
 - 24) Heaney, M. Object-oriented cataloging. *Information technology and libraires*, 14 (3), 135-153 (Sept. 1995)
 - 25) 本稿では目録の目的と記入単位一般についての議論は割愛した。読者はこの一文の主張と前段の議論の間に飛躍があると感じるかもしれない。
筆者は、物理単位と書誌単位の対立軸で目録記入のあり方を論ずる意見 — 例えばIntnerの“new paradigm”等 — と異なる地点に立っている。また、著作をより直接的に目録の対象に置こうとするかに見えるWilsonの意見や、「著作」とは書誌コントロールの目的を達成するために導入・採用された、いわば便宜的な仕組み…脆弱な基盤」だとする谷口の意見とも、やや立場を異にする。
Intner, S.S. A new paradigm for access to serials. *Serials librarian*, 19 (3/4), 151-161 (1991)
Wilson, P. The second objective. In: *The conceptual foundations of descriptive cataloguing*. ed. by E. Svenonius, San Diego, Academic Press, c1989, pp. 5-16
谷口祥一「三層構造モデル再論」『図書館学会年報』43 (1), 1-18 (Mar., 1997)
 - 26) 「書誌情報の交換を可能にする、つまり物ではなく、タイトルをキーとする資料の確認

の仕方、装置とが、…不可欠」(志保田, 前掲論文)

- 27) この構造の最上位の部分は、拙著「逐次刊行物におけるタイトルの変遷と記入単位」の続篇(未刊)で修正が加えられる予定である。
- 28) 日本の議論の概要は志保田前掲論文を参照。